

『科学者とは何か』おまけプリント

【本日のテーマ】

本文の内容をさらに掘り下げて考えてみよう！

①次の(A)、(B)の文章を読んで、『科学者とは何か』の主張との類似点を挙げてみよう。

(A) 専門の細分化についていえば、研究が\*精緻をきわめるにつれておのずから領域の細分化・分業をもたらし、あまつさえおとらず細分化された新たな研究領域を増殖する傾きのあることは、文科系の諸科学といえども理工系のそれとあまりかわるところがない。こうして細分化されますます精緻にされた研究が、\*自己目的化されて、「知るために知る」ことの一種\*倒錯した戯画を呈する危険を内蔵することは、これも基本的に文系、理系の区別を問わないことである。これこれの領域で緻密で非の打ちどころ一つない論文を書いてはみたが、その研究に何の意味があるのか考えてみれば本当のところは自分でもわからない、というわけである。

研究・教育にたずさわる側に、知識の細分化、というよりもより正確に言えば知識の細分化にともなうそのフェティシズム化の危険(と誘惑)があるとすれば、教育を受ける側には知識の断片化というこれまたよく似た一種の倒錯がつきまとう。(坂部恵『ヘインフォルマチオ』としての『人文学』より)

\*精緻：細かく緻密なこと

\*自己目的化：本来は手段であるべきものが目的とすりかわり、手段自体が目的になってしまふこと。

\*倒錯：本来のあるべき順序や秩序がひっくり返り、混乱すること。

\*フェティシズム：事物それ自体をあがめること。

類似点

(B) 西洋近代に発達した自然科学は、デカルトやベーコンらに代表される無機的な\*機械論的自然観に基づいている。二十世紀の科学・技術を振り返るとこの自然観に基づく帰納法的・要素還元的な方法論があまりにも極端に推し進められたきらいがある。それは、自然を徹底して人間と対立する外界の物質とみなして、客観的に観察し、一定の法則性を見出すとともに、実験や数式などによって理論化し、その理論を利用してモノをつくっていくという方法論である。

そこでは同一条件の下では必ず同一の現象が起きるといふ再現性のあることが大前提となった。逆に言えば、再現性のないものは自然科学の対象から除外してしまったのである。

概念や法則性を自然の事実からのみ構築しようという自然科学の方法論は、確かに世界の聖書の解釈からの決別という意味では画期的なことだった。しかし、それによって捕捉できる自然界が部分的となり、自然を全体として理解しようという態度を失わせてしまったことは否定できない。(常盤文克『「知の経営」を深める』より)

\*機械論：物事を、精密に組み立てられた機械のようにみなす考え方。

\*要素還元的(論)：要素(それ以上簡単なものに分析できないもの)を調べることで全体を理解しようとする考え方。

類似点

②類似点をまとめてみると・・・

現代科学のとらえ方

現代科学の問題点

③「科学者とは何か」の本文で言及されたもの以外に、現代科学の問題点を感じる具体例を挙げよう。